

## シベリア抑留記

熊本県 岡村 透

(旧姓 西田)

### 青少年義勇軍訓練所

昭和十六(一九四一)年三月十八日、吉野尋常高等小学校高等科二年生、十四歳の春であった。

当時の国策に沿って天皇陛下の御為に満蒙開拓青少年義勇軍に志願したのである。この日は村の消防団、国防婦人会を初め、小学校の全生徒が校庭に高い幟り旗をうち立て、自分の旅立ちを祝って見送りの式典が挙行された。学校の職員室で別れの盃も渡された。その中で女の先生が「あなたは子供だから」と言ってお酒を一滴入れて下さったことを覚えてる。学校から小川駅まで約四キロの道を旗行列で、出征兵士さながらの見送りを受け、小川駅から汽車にて出発、熊本県庁前にて壮行会が行なわれた。熊本県から約五〇〇人

の少年達が、父母兄弟や友達と別れを告げ、臨時列車にて茨城県内原駅下車。先輩達が出迎え、元気いっぱいの声で号令をかけ駅前整列。訓練所幹部の挨拶があり、訓練所まで約三キロの道程を歩いて行った。訓練所正門前には衛兵所があり、銃を持った歩哨が兵隊の服装で立っていた。衛兵所から大きな声で「敬礼」と叫んで所内に案内された。私達はますます緊張し、身が引き締まる思いで兵舎に入った。

ここ内原訓練所の日課は、六時、起床ラッパとドラ太鼓の合図で一日が始まる。六時三十分から点呼、礼拝と体操と駆け足は毎日行なわれる。七時四十分から朝食。八時三十分から十一時半まで午前中の学科や教練、武道等。十二時、ラッパとドラ太鼓の合図で昼食。一時半から午後の日課。作業や教練等。五時半、作業やめのラッパの合図で夕食に取りかかる。六時から八時まで入浴をしたり、自由時間として日誌書きや「開拓の歌」練習。八時、夜の点呼、礼拝。八時半消燈であるが、夜通し不寝番に一時間ずつ立って部屋の見回り等警戒に当たるのである。これには、二番立ち

以後は一日の訓練に疲れてぐっすり寝ているので、起すのになかなか起きてくれない。やっと抱き起こしたと思つて自分が床につくころにはまた横に倒れている。そんなときは自分が泣きたくなる。これらの訓練は、現地へ行って、匪賊や敵軍の侵攻を防御できる精神訓練である。私達はかくして一カ年間内原に残り、十七年二月二十五日、内地の基礎訓練を終え、下関港から釜山へ上陸、大陸の大きな列車に乗り一路満州へ。牡丹江省寧安東京城駅下車。一面真っ白い雪の広野を寧安訓練所まで四〇キロの道を歩いて行き、三月三日夕方、ようやく磨田中隊の真新しい看板のある訓練所へ入った。零下二十度というのに体は汗が出るくらいだった。夜は零下三十度まで下がっていた。

この現地訓練所では、内原訓練所の実践的訓練で、不寝番や歩哨勤務は酷寒の中に厳しく行なわれた。雪に閉ざされた広野も五月には一斉に草の芽が生えて、六月には一面、白蘭、紅蘭と野菊等色とりどりの綺麗な花畑のようである。その野にキジが、日本の群ガラスのように飛び交っている。この草原を散策すると、

彼方此方のキジの巢から卵を五、六個くらい拾うことがある。

夏は草原でキジの卵を取ったり魚釣りもできて、また内地からの慰問袋に励まされ訓練に耐えているが、日常の訓練は厳しく、ホームシックにかかり三日も四日も食事がのどを通らず泣いて寝ている者も多かった。こんなとき中隊長は、子供だから泣くだけ泣かせてやれ、休めば元氣を取り戻すと言つて気にもかけなかった。中には、自分に貸与された衣類を満人に売り払い旅費を作り、訓練所を無断で退所する者も少なくなかった。

#### 第四次義勇隊開拓団入植

このような訓練を三年間で修了し、昭和十九年三月三日、三江省鶴立県（佳木斯市の北方）の第六次熊本村開拓団の隣接地にめでたく義勇隊開拓団として入植した。このときは内原入所者の約半数が残ったのである。

先輩の熊本村開拓団の家庭まで一里以上離れているが、風呂に入りに行ったりして懐かしい熊本弁を聞

き、故郷へ帰ったような気持ちの落ち着きを覚えたのである。いよいよ日滿親善とアジア民族の共存共栄の旗の下に、将来を夢見て食糧増産に励んだのであった。当時、自分達の開拓団は、満人部落内に住民の家を空けてもらい、原住民と一緒に生活していた。

#### 関東軍に入隊

昭和二十年二月ごろ、十八歳の自分にも現役兵として検査があり、甲種合格。その年五月二十日、関東軍に入隊した。部隊は東粹第一国境守備隊七八三大隊第四中队光安隊である。初年兵の教育はでたらめに厳しいものであった。上官の命令には絶対服従であり、上官の命令は天皇陛下の命令と言って、やたらにビンタを打つのである。毎日、必ず一度や二度は打たれるのである。

我々食い盛りには毎日厳しい教育で、腹ペコで、班長の飯下げに行くのが楽しみの一つであった。食器洗い場に行き、班長の飯が残っている場合は、それを奪い合って手づかみで食ったのである。またあるとき、自分が病気で休んでいたとき、班長に言われて下着を

洗濯していたら、古参兵が来て、「お前は今ごろ、何をしているか」と言っていきなりビンタを二つ三つ打ち、それで自分が不動の姿勢でビンタを打たれる度にふらふらと倒れようすると「だらしがない」と言ってもまた強く打たれた。あまり打つので相手の動く方へ顔を回すとまた文句を言いながら打ち、手を水道の水で冷やして往復ビンタを打たれた。何十回打つか数えていたところ、四十五回以上打ったところで手が痛くなったのか、今度は説教を始めた。さんざん叱られて、とうとう一時間くらい洗濯もできず怒られていた。自分はその中で、今に見ておれ、戦争が始まったら弾は前からは来ないぞ、と自分に言い聞かせていた。こんな軍隊だったら日本はこの戦争には負けるに決まっていると思った。

こうして我々初年兵もようやく一期の検閲も終わってほっとしていたころ、二十年八月九日、早朝三時ごろ、自分が不寝番に立っていたとき、東方の遠くで砲弾の音が無気味に聞こえた。二回目にはもっと大きく聞こえたのですぐ班長へ報告に行ったところ、班長は

「直ちに全員起床させろ」と言われ、緊張して慌ただしく身支度する。急いで飯上げをするころには夜も明けきっていた。朝食もそこそこに、中隊長の命令により戦闘準備して直ちに陣地に入る。

### 「戦闘開始」宇賀神上等兵の死

各部隊は旭陣地とか出丸陣地へ、自分達は勝鬨陣地へ入った。そしてその夜、自分達六人はほかの者より早く夕食を済ませて駐止斥候に出た。夕闇迫るころ、陣地の外へ出て鉄条網の下まで山を下りたそのとき、自分と宇賀神上等兵が鉄条網を乗り越えるとき、グループから遅れてしまった。この鉄条網の外を右と左、どちらへ行ったか分からないのでそこらを探しているうち、左方向（ソ連側）にカサカサと木の枝が揺れる音がしたので、あそこだと急いで行ったところが、五、六メートルくらいの中から突然自動小銃（今まで聞いたこともない弾の速い機関銃）で撃たれた。二人はバツタリと倒れた。ひっきりなしに撃つ弾の花の下で宇賀神上等兵が「ウー」とうめき声を上げた。二声目にはかすかなうめきであった。自分は、

すっかりして下さいと揺り起こしたい気持ちで足を延ばしたが、上等兵には届かなかった。自分は手榴弾で応戦しようと思ったが、敵は大勢いるのではないか、あるいはあまり近過ぎて破片が自分に多く当たるのではと想ったりして、火花の下で歯を食いしばり我慢していた。ソ連兵は射撃を一秒もやめることなく撃ち続けている。その火花の中、夜空に小学校時代の友の顔、内原訓練所の友、満州訓練所時代のことが、映画のフィルムが切れてチラチラと流れるように見えた。そのとき、ああ、自分もこの山の中に死なねばならないのかと一瞬思った。宇賀神上等兵の死亡もわからないまま、この勝鬨陣地も不意打ちに遭うのか、自分は宇賀神上等兵の仇討ちをしなければ、一人は必ず殺してやるぞと身構えて敵が撃ちやむのを待った。火花の写真の最後に、母の写真が夜空にはっきり浮かんで見えた。いよいよ自分も国境のこの山の中で死んだらオオカミの餌食になるのだ、ここで死んではいけないと覚悟を決めた。まだまだ敵の機関銃の弾はバラバラと、自分のすぐ後ろや周りにブスッ、ブスッと、木の

小枝が折れる音等、ひっきりなしに撃っている。何分間撃ち続けたであろうか、自分には二十分以上はたっただろうと思えた。ようやく撃ちやめたので、自分は息を止めるようにして敵の出方を待った。また何分間か、静かな時が流れる。自分は暗がりの中、空の方をすかして見ていると、ソ連兵一人がソーッと静かに立ち上がりこちらへ見に来たので、この時とばかり、ズドンと一発撃った。見事命中、横へバツタリ倒れた。その近くにいたソ連兵数人がバタバタと下の方へ逃げて行くのがわかった。やっぱり敵も恐れているな、と思うが早いか、自分も一目散に陣地へ駆け登った。真っ暗い山の中で自分の陣地の様子も全くわからないまま、大声で「日本人だぞ、撃つな」とわめくようにして入り口をやっと探し出した。

直ちに中隊長へ報告すると、中隊長に「どうして上等兵を連れて来なかったか」と叱られた。「よし、また兵隊をやるから探して来い」と言われて、四、五人で陣地を下りた。そのころにはソ連陣地より砲弾が四、五分ごとに撃ち込まれ、また照明弾も間断なく撃

たれるので、我々は思うように下りられないのである。班長達は「西田（旧姓）、お前が先に行かねば方向も分からないではないか」と言われるが、自分もどこをどのように這い上がったのか判然としない。敵の砲弾も激しく、自分達の周りに破片や土砂降る雨の中を右往左往しながら鉄条網の所まで一時間以上かけて下りたが、宇賀神上等兵は探すことができなかった。班長も、「仕方ない、引き揚げよう」と言って帰途についたが、敵の砲撃が続いているので容易には戻れなかった。陣地へ入って中隊長へ報告すると、中隊長は、「よし、おれも行く」と言って、また班長以下数人にて陣地を下りて行った。もうそのころには照明弾は少なかったが、陣地を下りるのは容易ではなかった。今度は前より少し北寄り（ソ連側）に下りてみたが、なかなか上等兵を探すことができなかった。そのうち、辺りが明るくなり少し霧がかかったようであったので、中隊長も「駄目だ、あきらめよう」と言って引き返した。

#### 勝鬨陣地の最後

その数日後、部隊から食糧を運んで、暑いので陣地の入り口で十数人休憩していると、突然、砲弾が歩哨のところへ命中し、我々は陣地の中から爆風で全員四、五メートルは吹き飛ばされた。歩哨は真っ黒く焦げて即死した。自分は爆風で飛んできた石ころで頭を少し打たれただけだった。それから毎日、ソ連の飛行機の飛来にも、こちらからはどうすることもできなかった。

その後、八月二十日ごろだったと思うが、「自分達の陣地を砲撃されているから銃眼を見て来い」と言われて、自分達初年兵三人にて、カンテラを持って西側の銃眼を見に石段を登ったところ、自分達の頭上に砲弾が落ちたらしく、地響きでカンテラが消えたので一人が火をつけに本部の方へ戻って行った。そのころ、また頭上に砲弾の破裂が上がったので、今この陣地を狙い撃ちしているから下ろうと言って、二人が暗い石段を下りて中の通路へ入った途端、砲弾が銃眼から命中して、トンネルの中を落雷より凄まじい轟音がガンガンと側壁に打ち当たりながら飛び込んで真ん中の通路に

打ち当たり、直径三十センチくらいで高さ約八十センチもあるような砲弾が火を噴くようにグルグル目の前で回っていた。そこへ中隊長も大声で「今のは何だったか」と怒鳴るようにして駆けつけられた。自分が「砲弾が命中しました」と言うと、「みんな避難せよ、麻袋（マアタイ）を持って来い」と言われて、決死隊に五、六人出してもらい、弾を少しずつ転がして外までまくり出した。それからは陣地も危うくなり、もし爆破されるようであれば全員死守しなければならないと言って、毎夜陣地の外へ出て塹壕掘りを始めた。四、五日かかって掘り、溝の中を自由に動けるようになった。

そのころ、夜襲総攻撃を受け、砲弾・機関銃・照明弾も上がり、戦場は正に落雷と同席するかのような地響きの中、我々は銃を構えて腹這いで足を踏ん張っているが、ガタガタ震える。敵はどこから撃っているのか方角も全く分からず、ピュンピュンと土砂や破片が飛んでくるのである。「西野、大丈夫か。高見、大丈夫か」と声をかけたが、皆、ガタガタ震えていた。こ

の猛攻撃の中、今夜でこの陣地も玉砕かと必死に戦った。何時間総攻撃があったろうか、夜明けまで続いた。ようやく敵も下がったようである。

それから数日後、八月二十七日、天気もよく朝から静かな戦場だなあと思つて警備に就いていた。十時ごろであろうか、ソ連領から松花江を大軍（一千人ぐらい）が渡つて来た。そして自分達の陣地の近くまで来て、部隊は止まった。その中から数人が白旗を掲げて本部陣地の方へ登つて行くのが見えた。自分達の陣地では中隊長が、本部から命令があるまでは絶対発砲しないよう注意されたので、今日は何かが起こると思いつながら、ソ連軍の様子を見守っていた。先の白旗を持ったソ連軍は本部陣地へ登り山上にそのまま立てたところ、停戦になったから全員、弾薬と食糧を持てるだけ持つて陣地を下りて来いと言われた。自分達は、何のことかわからないが中隊長の命令に従い、昼食を急いで済ませて食糧や弾薬等持つて下山した。途中にはソ連兵が見すほらしい服装で、靴も服も破れている者や巻脚半もチグハグであったり、ただ銃だけは優秀

な自動小銃を持つて、我々をこわごわ監視していた。その中を自分達は部隊の後方まで行くと、もうそこにはほかの陣地の中隊も武装解除され、銃や帯剣も山積みされていた。このとき、日本の敗戦を知った。そのうちに、あの陣地にも女性がいたのを見た。これから自分達はどこへ連れて行かれるのか、集団で殺されるのではないかといろいろ想像した。

#### 我が関東軍の敗戦

その日も夕方になり、野宿しながら数日間歩いて金蒼という所に着いた。途中、川の辺りでは数々の日本人の死体を見た。また、馬の死体は腹のあたりが腐つてひどい臭気が鼻をついた。死んではいけないと自らに言い聞かせ、猛暑の中、歩き続けた。五列に並んで歩いているが、大部分の兵隊は疲れ切つて、眠りながら前や横の者にぶつかりながら歩くことも多かった。途中の休憩の折は、草むらにバッテリー倒れるように寝転んでしまうありさまだった。このように苦しい行軍をしながら、四、五日かかって金蒼という所に着いた。ここには、すでに数百人の日本人が集結してい

た。ここで十人くらいのグループでテントを張り雨露をしのいで、日本へ帰れる日を祈るような気持ちで待ったのである。ここではときどき使役に出てくれと言ってきたが、仕事の内容は覚えていない。この収容所には数千人はいたようだった。

ここ金蒼を、九月二十日と思うが、数百人を一集団として日夜行軍で北の方向へ歩いて行つた。小高い所から、遠くに市街地のような灯りが見えたので喜んでみると、その灯りは皆動いてはいないか。翌日通つて見ると大型トラックで、ソ連軍が占領品を運んでいたのである。数日かかつてソ連領に行つてみると、学校の体育館くらい大きなシートで覆つた、山のような占領品が積まれてあつた。ソ連軍が満州へ侵攻してから一カ月以上、毎日毎夜数百台のトラックで運んだものである。

#### シベリア・ソフガワニ収容所

自分達はソ連領に入つてからも、日本へ帰るのだと言つて汽車に乗せられ、幾日かかつたらうか、十月も中ごろだったと思う、夜明けには真っ白い霜が降りて

いた。そして山林の中の第七コナ収容所に入れられた。日本から迎への船が来るまでここで働けと言うのである。

この収容所には一千人ぐらいたであらうか、長い倉庫のような建物の中の通路を挟んで、両側は二段の寝台となつている。一つの小隊ごとに起居し、飯受領には、各人が空き缶を食器代わりに利用していた。朝は黒パン三百グラムぐらいたとスープだけで軽い食事を済ませて、九時ごろから山の木伐採と、馬糞で鉄道線路の方へ引き出す作業である。

この作業出発前に零下四十度以下のときは作業待機させられていた。また零下三十度ぐらいたでも、出発前に衛兵所前で全員五列に並べて歩哨が人員調べで数えるうちに、途中で五名が揃つていなかったり、しゃがんだりしていると数を間違えて、また初めから数え直す等時間がかかるので、作業監督は早く出発せよと怒つたりしている。また、ある朝はドクターの服装検査があり、手袋が少しでも破れている者が二、三人いると、それを直ちに取替えて来いと言つて、皆はその

の二、三人のため何十分も待たされるのである。また、作業監督と喧嘩しても、女のドクターは頑として許さなかった。我々にはありがたい存在であった。

自分達の作業は、鉄道沿線に機関車のための薪切りである。少しの食事で酷寒の雪の上にいるだけでも疲れるのに、一日じゅう、長い二人挽き鋸で七十センチくらいの長さに切り、高さメートルくらいを長さ十メートルくらいまで積み重ねるのが一日のノルマであるが、割当量の仕事ができない場合は、作業監督は、ノルマ完成までやれと言う。歩哨は、時間にはやめて帰ると言い出して、またここでも歩哨と監督の争いがあるのである。

時には歩哨と監督に強いられて三十分くらい残業させられたこともあるが、我々は疲れ切っているので、監督がいないときには焚き火にあたり休んでばかりいるのである。こうして疲れた帰り道は、トボトボしか歩けない者を、歩哨は「ダワイ、ヴィストラ」と怒鳴りながら、前を急がせたり、また後を急がせたりして、ブツブツ言いながら帰るのである。

部屋に着いたら、「飯上げ」と呼びに来るのを待つ時間が長いこと、寝台に横たわり、しゃべる元気はなかった。ノルマ食をもらえないので、お粥のような高粱飯を小皿いっぱいぐらいとスープだけである。これを箸で食ったり、白樺で作ったスプーンで少しずつ食べて、少しでも長い時間かけて食事を味わうのである。そして、内地で食った饅頭のことや、いつかの赤飯が美味かったこと等、早く日本へ帰って腹いっぱい食いたいことばかり思っているのである。

夜寝台に横になると、今度は南京虫にかまれてなかなか眠れない。このような苦しみの中に、翌朝「飯上げ」を呼びに来ても、隣に寝ていた者が冷たく死んでいたのである。昨日まで、家に早く帰りたいと言っていた兵隊が、誰の介護も受けられず亡くなっていった。同じ日本人としてどうすることもできなかった。自分達も、祖国日本へ帰るまでは絶対死んではならないと自分に言い聞かせ、来る日も来る日も心で泣いて耐えしのいでいた。

二十一年六月ごろには、雪も消えて青い草の芽が出

ると、すべて食べられると思い、野草を空き缶で茹でて、塩味もないものをおにぎりにして食っていた。中には毒草があり、数時間で死亡した者がいた。一番多い日には、一収容所で一日に十四人も亡くなったこともあった。それからはソ連側でも心配されて、野草は収容所内で体の弱い隊員で食べられるものだけを採取するから、皆さんは個人で取らないで下さいと注意されたが、自分達はアカザやノビル等、日本でも食っているものを採って取って食べたものである。何でも少しでも多く食べたい気持ちだった。夏の間は、カエルやヘビやネズミも焼いて食べたものだ。

また、その年の冬には、収容所で朝食に黒パンとスープをもらって来て、冷たいのでパンを温めようとしてストーブに乗せて、ちょっと寝台の所へ何か取りに行つて戻つたら、その一瞬にパンがなくなつたと言つて騒いだが、犯人はわからなかつた。朝食を盗まれた本人はどうすることもできず、スープだけですつて作業に駆り立てられ、ますますひどい思いで苦労したのである。

またあるとき、自分が小用に外に出て、月がこうこうと輝いている夜空を眺めて、あのお月様は日本でも見えているだろうに、飛んで行けるものなら自分も飛んで帰りたいと思つていると、この寒空の下に一人の兵隊が、「姉さん、あなたはなぜそんなところへ上つているのですか、私もそこへ行きたいです」と拜むように手を上げて呼んでいるではないか。誰もが故郷を思い、苦しんでいたのである。それから数日後のことである。ある者が、収容所の炊事場裏の鉄条網の外に捨ててあつたジャガイモの皮を取りに柵の外へ手を出したところ、その手を監視兵が銃にて撃ち、重傷を負つた者がいた。この収容所では、食べることだけが自分達の何よりの支えであつた。

### 銃殺

時には、日本から迎への船が来たと言つて汽車に乗せられ、しばらく行くとまた、まだ船の整備ができていないと言つて別な収容所に入れられた。ここでは鉄道線路の仕事で、台車にてバラスを積んで来ると、それを貨車の両脇に降ろして、貨車が出た後で枕木の下

へ敷き込み、線路を少しずつ嵩上げしていくのである。この作業の休憩時間には、野草を取って茹でておにぎりにして収容所へ持ち帰り、夕食時にゆっくり食っていた。このころには便が青い草餅のようで、また取って食べたいと思うほど草を食べたのである。

ある日のこと、駅のホームの先から数人がキャベツやジャガイモを拾ってきたので、自分もまだあると思いい、一人でトボトボと歩いて拾いに行ったが、どこにもそれらしい物はないので、そのまま探して百メートルくらい行っただろうか、耳元を不気味な音がして、林の中にバシッという音と同時にドーンと銃声が聞こえた。身の毛のよだつと言うか、血の気がなくなるように驚いて振り向くと、歩哨が大声で怒鳴っていた。この歩哨は、水辺に浮かぶ水鳥を撃つときは頭を狙い撃ちするように射撃が上手であるが、自分には当たらなかつた。お蔭様と言うか、ソ連の射撃にも四度、命を助けられたのである。

#### 収容所の入浴

この捕虜収容所でも一カ月に二回くらい入浴ができ

た。その日には衣類の着替えはないが、入浴時間中に滅菌乾燥されるのである。自分達が入浴しているところにロシア人の作業監督も一緒に入浴に来て、「ヤボンスキー、ダワイダワイ」と言いながら体を洗えと言うので、自分達四人がかりで背中や両腕、両足と、真ん中の男のものまでさすって洗ってやった。これは平常でも大きくて、いざカマクラのときでも大きさは同じというバナナぐらいのものであった。この入浴が終わるとその場で、我々のお宝も必ずヒゲ剃りされるのである。何日も子供のように見えている。これは毛虱予防と言っていた。

#### ダメイ準備、慕わしい帰国

昭和二十四年七月下旬、ようやく日本へ帰れると言って汽車に乗せられたが、この四年間、幾度か騙されてきたので今回も信じていなかったが、汽車の旅が少し長いぞ、今度は本当かなと思っていたら、ナホトカという所に着いた。ここでは、日本へ帰る前に共産主義思想教育をやらされた。毎日、食事は米が少し入った高粱飯であったが、量も多くて、パンとスープ

で大体腹いっぱいになった。何の作業もなく、勉強会と歌や踊りとタップダンス等を教えられ、日本の盆踊りの練習会さながらであった。

これまでのラーゲルでは、少しのパンとスープだけで毎日仕事をやっていたが、ここでは一カ月間何もしないで遊んで食べているので、我々も体重が増えて健康体ようになった。

八月二十三日、いよいよ日本から迎えの船が来たと言うのでよく見ると、日本語で「英彦丸」と書いてあったが、まだまだ本当に日本へ帰れるとは信じなかった。ナホトカを出航したが、海は湖のように波も静かだった。翌々二十六日、憧れの舞鶴港に着いて初めて、終戦から四年間、苦勞はしたが生きて帰れた喜びをかみしめた。しかし、船は埠頭に着岸されないのどうしたのかと思っていると、体の消毒を行なうと言って、全身頭から白い粉のようなものを吹きかけられて船内で一夜を過ごした。満州へ渡航以来、八年ぶりに日本へ帰ったのである。敗戦の日本はどうなっているだろうか心配していた。早く我が家の母達の顔

が見たいと思っているのに……。ここ舞鶴では「お帰りなさい、長年ご苦勞様でした」といろいろとねぎらいの言葉で接待され、復員の手続きをされた。そしていろいろの衣類や食品配給券等を支給された。三十日、臨時列車にて舞鶴を出発。車中、大きな駅ではお茶の接待や弁当を下さった。また駅々で日の丸の旗で迎えられた。

八月三十一日、熊本駅には兄が迎えに来ていた。また小川駅に着いたところ、村の人達が大勢迎えに来て下さっていた。自分は義勇軍に出発の時を思い出し、非常に感激した。家でも大変なごちそうで迎えられ、母達の元気な顔を見ることができた。しかし、自分は生死の境を乗り越えて生きて帰れたが、彼の国境陣地で亡くなった宇賀神上等兵のことを忘れることはできなかったのである。

宇賀神上等兵の墓参を果たす

家に帰って毎朝食前に神仏にお参りしながら、宇賀神上等兵には申し訳ない気持ちでいっぱいである。宇賀神氏の家族へ、陣地で死亡した様子を報告しなければ

ばならないと心に決めていた。それから、復員列車のことや兵隊に関する会合には必ず参加して、満州第一国境守備隊のことを知る人を訪ね歩いていった。

昭和四十五年八月九日、熊本市民会館において「満ソ殉難者大慰霊祭」が挙行された。この会場に、元満蒙開拓青少年義勇軍の同胞も多く参加されていた。式典後、各中隊ごとの会合を持ち、各地に散在する拓友を探し、熊本県の義勇軍の集いが川元中隊長により結成された。以来再三会合を重ね、昭和四十六年六月六日「義勇軍熊本県連絡協議会結成準備会」開催、九月二十六日「総会」を開催され、いろいろの活動方針等を決定する。自分は宇賀神上等兵の家族のことが気になり、熊本県庁にも再三出向いて援護課に尋ねたり、遺族会館に尋ねに行ったがわからない。満ソ殉難者慰霊顕彰会事務局を軍人恩友会にてやっておられたので、この事務局長に尋ねたところ、「厚生省へ手紙を出してごらん」と言って連絡先を教えて下さった。

昭和五十二年七月七日のことである。早速陣地の様子を書き、手紙を出したが、なかなか返事が来ないの

で、再度八月十日厚生省へ手紙を出したところ、ようやく返事があり、貴殿が探しておられるのはこの人でしょうと言って、宇都宮市役所を紹介されたので、また市役所へ手紙を出した。この返事で、宇賀神光明氏であることが判明した。早速、宇賀神氏宅へ「墓参に行きます」と手紙を出したところ、弟様から「宇都宮駅まで迎えに行きます」と返事あり。昭和五十二年十一月十三日、ようやく宇賀神宅を訪問することができた。ご両親は五、六年前に亡くなられたと聞き、自分は非常に残念に思った。長男も亡くなられて奥さんだけが、弟ご夫妻と一緒にいられた。自分は二十年八月九日、故光明氏のことを子細に説明申し上げ、墓前に花と線香を供え、仏前にもお参りすることができた。自分はこれまで戦場のことも幾度か夢にまで見ていた。墓参ができたことで、長年思い悩んでいた肩の荷を降ろすことができたのである。それ以来、自分は日本のこの繁栄の世に長生きさせていたでいる。また、宇賀神光明氏には申し訳ない気持ちで、毎年八月九日の前に、私が墓前に参拝すべきところ、宇賀神様

に代わって参拝していただくよう、線香代だけ送らせてもらっている。

自分は今、戦争の愚かさと平和の尊さを永遠に語り継がねばならないと心に念じている。また、地球の大自然の恵みに感謝の気持ちで過ごさせてもらっているのである。今日も一日、ありがとうございます。

### 【執筆者の紹介】

出生 大正十五年六月四日生まれ

学歴 昭和十六年三月、地元吉野尋常高等小学校

卒業と同時に満蒙開拓青少年義勇軍志願、

茨城県内原訓練所入所、一年間、教育訓練に従事

渡満 昭和十七年三月、満州牡丹江省寧安訓練所

入所

入植 昭和十九年三月、三江省鶴立県第四次開拓

団に入植

軍歴 昭和二十年五月、関東軍へ現役入隊

八月九日開戦、二十七日武装解除

入ソ

昭和二十年十月、以降ソフガワニ収容所で伐採作業に従事

帰国

昭和二十四年八月、舞鶴港上陸

就職

昭和二十六年一月、小川郵便局勤務

退職

昭和五十七年六月、同局退職

この間、昭和四十八年より熊本県満ソ殉難者慰霊顕彰会理事

会務

昭和四十九年より熊本県拓友会会長、全国拓友会理事

現在

熊本県拓友会会長、満ソ殉難者慰霊顕彰会理事、熊本県中国残留孤児等対策協議会常任理事に就任、残留孤児等の肉親探しに奔走中、全抑協小川支部支部長

住所

下益城郡小川町海南  
(熊本県 南部 吉正)